

RAKUGO
THE
FUTUREJAPANESE TRADITIONAL
ENTERTAINMENT

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

第 17 回:トンデモなおはなし

・「君ってどんな音楽が好き？」

「あたし、昔流行ったゴダイゴが好きなのだ」

「へーっ、奇遇だなあ。ぼくもゴダイゴの大ファンなんだ。ガンダーラとかモンキーマジックとか。ぼくたち気が合うね」

これがほんまの「フィーリングカップル・ゴダイゴ」やおまへんか。

・「こら、われ、何をイキっとんねん」
(大阪では、いきがるということを「イキる」という)

「あ、兄貴」

「おまえらみたいに中途半端にイキっとったかてあかん。イキるんやったら、命がけでやらんかい」

「そんなことができまっかいな」

「あほ。わしの知り合いにそういうやつがおるんじゃ。そいつはハードボイルドなんや」

「何のことです？」

「ハードボイルドちゅうのは、もともと卵の茹でかたのことやろ。つまり、固め ちゅうこっちゃ。眼帯しとるんや」

「兄貴も気いつけてしゃべってはりまんねんな。その目がかたっぽお悪いかたの人のお仕事は何ですもん」

「海賊や。アルカディア号という船に乗っとる」

「それ……もしかしたら昔懐かしいキャプテン・ハーロックとちやいまっか」

「そや。命を捨てて俺はイキる、いうやろが」

というようなあほなことを残暑の間中言いまくっていたら、いつのまにか世間はそろそろ秋の気配。シャンゼリゼ通りのオープンカフェで、舞い散るマロニエの木の落ち葉にわが身の来し方を想い、長い髪を物憂げにかき上げつつ、熱いミルクコーヒーを啜りながら、あの時の決断はあれでよかったの

だろうか、俺にはもっと別の生きざまがあったのではないか、などとあれこれ振り返っていると、ふと「邪馬台国はどこにあるのだろう」という疑問が頭に浮かぶ。そんな経験はありませんか。また、あわただしい朝の通勤時、混雑した電車の車窓から見えた一人の少女の横顔。二十三年前、仲良しだったリカちゃんにそっくりだ。あんなに仲がよかったのに、引っ越して以来、一度も会ったことがない。人生ってそんなものかもしれない、などとため息をついていると、ふと「宇宙人は地球に来ているのだろうか」という疑問が頭に浮かぶ。そんな経験はありませんか。

私はありません。

ありませんが、実は私はそういったトンデモな話が大好きなのである。たとえば、ネッシーは本当にいるとか、宇宙人は本当にいるとか、雪男は本当にいるとか、チュパカブラは本当にい

るとか、モケレ・ムベンベは本当にいるとか、ヒバゴンは本当にいるとか、コンガマトーは本当にいるとか、大海蛇は本当にいるとか、妖精は本当にいるとか、クラーケンは本当にいるとか、モーガウルは本当にいるとか、キャディは本当にいるとか、クッシーは本当にいるとか、モラグは本当にいるとか、オゴポゴは本当にいるとか、マニポゴは本当にいるとか、吸血鬼は本当にいるとか、狼男は本当にいるとか、ジェヴォダンの野獣は本当にいるとか、デヴォンシャーの動物は本当にいるとか、モスマンは本当にいるとか、ツチノコは本当にいるとか、タツツェルバウムは本当にいるとか、鬼は本当にいるとか、河童は本当にいるとか、天狗は本当にいるとか、ザシキワラシは本当にいるとか、ニグ・ジュギペ・グアは本当にいるとか、兆は本当にいるとか、星飛雄馬は本当にいるとか、おじゃる丸は本当にいるとか……

RAKUGO
THE
FUTUREJAPANESE TRADITIONAL
ENTERTAINMENT

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

第 17 回:トンデモなおはなし

まあそういった「○○は本当にいる」「○○は実は××だ」とか「○○は実はどこどこに来ていた」とか「○○が××なのは実は の陰謀だ」とか「○○なんて実は嘘なんだよ」とかいった類の奇説・怪説は、人生にうるおいを与えと思う。もちろん、読んで「あははは」と笑っているうちは、という意味で、これらを真剣に信じるようになると、ある種の宗教と同じで、人生踏み誤ってしまうのである。なにがとも、あまり度を超して「信じる」というのはいかんのではないかと思う今日このごろである。たとえば、よくテレビでオカルト賛成派と反対派が朝まで不毛な議論(だって絶対に結論は出ない)をしておられるが、「霊魂はぜえったいにああああある!」と叫ぶのも「霊魂なんぞぜえったいになああああい!」と叫ぶのも、どちらも「信じる」ことには変わらないわけで、「霊なんちゅうもんは、まあ、その、あ

るような.....ないような.....はたまたあるような気もするし.....ないような気もするし.....あったらあったで面白いけど、なかったらなかったで困るし.....その、なんちゅうか、まあ、一言で言うと、ずばり言って、早い話が.....」という態度を貫くのが一番いいのではないかと思う。こういう態度をとっていると、「曖昧だ」「はっきりしろ」などと両陣営から突っ込まれたりするので、世の中はむずかしい。

さて、その手のトンデモな話の中で最近最も驚いたのは、ある著名な日本人がアフリカで死んだという説である。それについて私の知っている限りのことをお話ししよう。ほんとに嘘かは知らない。だからトンデモなのである。取材ソースもお教えすることはできない。固く口止めされているからだ。ある筋からである。道具屋筋とか松屋町筋とかではない。「信頼できる筋」からとだけ申し上げておこう。

アフリカの某国(これも名前を出すことはできない。国際問題に発展する可能性があるからである)に探検に行った著名な文化人類学者Y(これも名前を出すことはできない。本人がさる筋から狙われる危険があるからである。さる筋とは御堂筋とか茶屋町筋とかではない。「古来、国際的に隠然たる勢力を持つ筋」とだけ申し上げておこう)の一行が、ある村に立ち寄った時のことである。その村は「ンクワゲツ」村という名前であった。Yは、その村に古くから伝わるといういくつかの奇妙な風習に興味をひかれた。ンクワゲツ村では、生まれたばかりの赤ん坊の額に、ハケケザルの血で、ある図形を描くという習慣があるのだが、その図形は菱形の花びらのようなものを三重の菱形で囲んだものであり、周辺の村ではそのような習慣はなく、その図形に類似したものすら存在しないという。ンクワゲツ村の長老の話では、

それはあらゆる悪魔を祓う聖なる図形だという。そして、村中の者総出で一系まとわぬ裸になり、その赤ん坊を囲み、腹を抱えて大笑いしながら再び衣服を着る。「笑いは悪霊を追い払い、幸せをもたらす」というのが、この村の人々の根本的な思想であって、それは、一種の原始宗教であろう、とYは説明する。周辺の村とは全く異なった文化形態を持つンクワゲツ村に深く関心を持ったYは、村にとどまって調査を開始した。その結果、いろいろとおもしろいことがわかってきた。

年に数回行われる村の祭りだが、アフリカ諸国には例のない変わった踊りが披露される。太鼓と横笛と撥弦楽器による伴奏に乗って、筒袖の衣服を着た踊り手の村人は軽妙な仕草で優雅に踊る。演奏される曲も、アフリカ諸国に顕著な、リズムが強調される呪術的なものではなく、どこことなく東洋風である。Yが長老に、こういう踊りはいい

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

第 17 回:トンデモなおはなし

つ頃から行われているのかとたずねると、

「遙か昔、一人の肌が黄色い神が赤い乗り物に乗って海を渡ってやってきた。彼は、当時の村人に不思議な知識をいろいろと授け、この村で死んだ。我々は今もその神の教えを守り、彼を信仰して暮らしているのだ」

という。アフリカに限らず、神が海を渡ってきて、村人に知識と幸福を授けて帰っていき、そして、村人たちはその神の再訪を今も待ち続けている、というタイプの伝説は多いことから、Yはこの村のものもその一種だろうと考えた。その神の名は「パルダン」といい、長老は、「パルダンを讃える歌だ」と説明して、手拍子をしながら、か細い声で、何とも奇怪な旋律の歌を歌い出した。

「ゲノタ・メーララヨ・ボオ・ラカスー・レガンド・ウシサ・モン・クガール・カー……」

Yは、せつないような、乱暴のようなそのメロディーに心惹かれ、自分でもふんふんと口ずさんだが、なぜか同行の日本人研究者Tの顔色が変わっている。

「T、どうかしたかね」

「い、いや……ちょっと……この曲に似た曲を知っていたものだから」

似たようなメロディーの曲は世の中にごまんとある。YはTの反応を気にもとめなかった。

この村の男たちの主たる仕事は狩りだ。チームを組んでジャングルに狩りに出発したら、普通、一週間、長い時は一ヶ月も帰ってこない。彼らが狩りに出かけるという時の、道中の無事を祈り、出発の気分を高めるための曲というのも聞かせてもらった。太鼓と撥弦楽器による複雑なメロディー。しかし、勇壮さはあまり感じられない。それを耳にすると、Tの顔色はますます青くなっていった。

長老に頼み込んで、部外者には絶対に見せないという彼らの秘密の儀式を見学できることになった。夜、ジャングルの前にある広場に焚き火をし、村人全員が正装して集まる。そこへ、その日の「語り部」役が登場し、一段高くなった場所に座る。その座りかたが特異だ。脚を折り、膝を揃え、足の裏を上にするのだ。

「セイザだ……」

Tが呟いた。

「セイザ？ 何のことかね」

「日本では、ああいう座りかたが正式なんだ。なあ、Y、私の頭が変になったなんて思わないでくれよ。だが……だが、そうとしか考えられないんだ。この村には以前、ある日本人が訪れたことがあるにちがいない。いや……そんなはずはない。そんなはずはないんだが……」

「何を言いたいのかまるでわからないね」

「つまり……」

「しっ。黙って。儀式がはじまるぞ」

語り部役は、あるものを取り出して、自分の前に置いた。紙を蛇腹に折り畳んだもののようには思えたが、たしかではない。これから行う儀式は、偉大な神パルダンに捧げ、その魂を慰めるものである旨を前置きし、深々と頭を下げると、語り部はおごそかに話し出した。かなり長い間、彼はしゃべっていた。娯楽の少ない村でありがちな、トークショー的なものかもしれないとYは思った。話の内容は、要約すると、ある人物がある女性のところに強盗に行き、ナイフが何かで彼女を脅したが、彼女はひるまず、強盗を諭した。強盗は改心し、最後にその女性が「誰かにここに行けと指示されたのですか」とたずねられると……そこからYにはよくわからないのだが、ここで村人たちはどっと笑うのだ。次の話は、ある強盗が商店に入り、その若

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

第 17 回:トンデモなおはなし

者を殺して、その首を掻き落とし、桶の中に入れて逃げて、いまだに捕縛されていない、という内容だった。かなり猟奇的な殺人を扱ったものだが、なぜか子供から老人まで大笑いしながら聞いている。

「どうして彼らは笑っているんだろう。我々にはわからない笑いの要素が含まれているのだろうか」

そう言ってTを見たYは、Tががたがた震えているのを見て驚いた。

「どうしたんだ、T。熱でもあるのか」「まちがいない。彼は.....彼は来ていたんだ、この村に.....そう考えると全てのつじつまがあう.....」

「何を言ってるんだ」

Yが長老に、どうして笑っていたのかときくと、長老は言った。

「そういう風に決まっているのです。この箇所とこの箇所、どっと笑うというのが規則になっているのです。とくに最後の部分では、それまでよりも

大きな笑い声を上げなくてはなりません。それが、パルダンの教えなのです」

長老は、せっかく外国から来たのだから、と、彼らに、門外不出の「パルダンの遺物」を見せてくれるという。Yは小躍りして、長老の家の裏にある宝物庫に向かった。長老が宝物庫の扉をあけると、そこには、朽ち果てた物体が置かれていた。大きな輪が二つあるのが見てとれるが、そのほかの部分には腐食がひどく、どんなものだったのかよくわからない。ただ、全体がもともと赤く塗られていたことはわかる。「これは何ですか」

「パルダンが乗ってきた乗り物です」

「ああ、言い伝えに出てきた.....」

「そうです。我々の先祖は、何百年にもわたってこれを大事に保存してきました」

その時、Tが悲鳴のような声を上げた。

「ジンリキだ.....」

と彼は言った。何のことかとYが問い返しても、Tは応えなかった。ただ、蒼白な表情でがくがくと体中を震わせるだけだ。最後に、彼らは、パルダンが葬られているという墓に行くことになった。それを聞いて、Tは叫んだ。「そんなものがあるはずがない。彼は.....彼は日本で死んだんだ！」

「彼？ 彼って誰だ」

「.....パルダンだよ.....」

Tは謎めいたことを言うだけだった。彼らは長老の先導で村の裏側にある墓に行った。そこには、巨大な石でできたモニュメントが建てられており、YはたしかにTの言うように日本的なものを感じないこともなかった。「ここが偉大な神パルダンが葬られている場所です。パルダンは今から八百年前にこの地で亡くなりました」

長老が言うと、Tがそのモニュメントの表面に掘られた文字を指さして絶叫した。

「やっぱりそうだ！ 何が八百年前だ！ 彼が死んだのは1934年だぞ！」

しかし、その石造りのモニュメントの古さは、たった六十年前のものとはYにはとうてい思えなかった。何重にも苔がむして、八百年前のものという長老の言葉のほうに信憑性があった。YがそのことをTに言うと、Tは狂気を目に宿して言った。

「何もわかっていないようだな。教えてやろう。赤ん坊の額に描いたあの記号.....あれは、三升に花菱 という紋なんだ！」

「モン？ モンとは.....」

「黙ってきけ。赤ん坊を囲んで裸になり、服を着ながら大笑いするのが、笑いは悪霊を追い払い、幸せをもたらすからだと言っていたな。あれは、笑う門には服着たるという駄洒落にちがいない」

「カド？ カドとは.....」

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

第 17 回:トンデモなおはなし

「黙ってきけ。村祭りの踊りは、あれは寄席で噺家がよく踊るやつだ。狩りに出かける時の曲は 出囃子 だ。噺家が、高座にあがる時に演奏される曲なんだ。ちなみにあれは 野崎 だ」

Yには、Tが何を言っているのかまるでわからなかった。

「さっき見たパルダンの遺物というのは、赤く塗られた人力車だ。赤い人力車に乗っていたといえば……」

「おい、T、しっかりしろ」

Yが差し出した手をはねのけ、Tは虚ろな目で続けた。

「村の名前のンクワゲツというのは、おそらく花月だろう。語り部が語ったのは 阿弥陀池 というネタだ。誰ぞが行けと言うてんやろ。へい、それやったら阿弥陀が行けと言いました。そんな話聞いたか。聞かん。きかんはずや、糠に首や……」

「気をたしかにもつんだ！ 君は疲れてるんだ」

「気ならたしかだ。私は正気だ！」

「だったらきくが、君はさっきから何のことをしゃべっているんだ」

「ラクゴだ」

「ラクゴ？」

「日本に伝わる長いジョークだ。それを専門に行っている者をハナシカという。信じられないことだが、今から八百年前、この村に、あるハナシカが日本からやってきた。彼がさまざまなものを村人に伝えたのだ。パルダンを讃える歌というのを長老が歌ったろう」「ああ、書き留めてある。ゲノタ・メーララヨ・ボオ・ラカスー・レガンド・ウシサ・モン・クガール・カー……」

「本当はそうじゃない。八百年の歳月の間に変形してしまったんだ。元の形はこうだ。芸のためなら、女房も泣かす。それがどうした文句があるか……」

Tはマイクを持つかっこうをして朗々と歌い上げた。Yがやめさせなけ

れば、おそらく二番も歌っていただろう。

「で、その人物の名前は何というんだ」

「まだわからないのか！ パルダンだよ。つまり……」

Tはある名前を口にしたが、Yにはまるで聞き覚えのないものだった。

「有名な人なのか？」

「知らんのか！」

Tは憤激した。

「有名も有名。むちゃくちゃ有名なんだ。初代桂春団治といえば、日本ではこんな小さな子供でも知っている！」

それを聞いた途端、村の長老が言った。

「ほんまかいな！」

……というようなトンデモな話を最近、ある筋から聞いたのだが、もちろん信じる信じないはあなたの自由である。ただし……よそへ行ってしゃべらないようにしてもらいたい。恥をかく

から。何？ いつもにまして今回はわけがわからない？ 当たり前でしょう。トンデモなんだから。